

長野県植物誌改訂 研究史資料 9: 浅野 一男

中村 千賀*

長野県にゆかりのある植物研究者を紹介する連載として、今回は飯田・下伊那地域を中心に精力的に調査され、昨年亡くなられた浅野一男氏(写真1)を紹介する。本稿には長野県植物研究会副会長の大塚孝一氏に貴重な原稿をいただいた。また、資料の収集には大塚氏と長野県環境保全研究所にご協力いただいた。厚く御礼申し上げます。

浅野 一男 氏 (1929-2022) 略歴

1929 年、東京市麻生区(現東京都港区麻布)生まれ。東京学芸大学、東京大学内地留学、玉川大学に学ぶ。宮城県・東京都・長野県・埼玉県の公立小中学校、昭和女子大学中高部に勤務。県内では飯田・下伊那地域の小中学校の教員を務めながら、同地域の植物相や民俗について広く調査し、植物社会学を中心に分類学、民俗学の分野で多くの成果を残す。環境大臣委嘱希少野生動植物種保存推進員、長野県版レッドデータブック作成委員会植物専門部会員を務める。2022 年死去 (93 才)。

浅野一男氏は、昭和 4 年(1929)に東京市麻布に生まれた。尋常小学校 5、6 年生のときに飯田市龍江出身の教諭が担任となり、植物を通して豊かで変化に富んだ素晴らしい自然があることを学んだ経験が、植物研究をライフワークとする端緒であったという。

昭和 25 年(1950)に、県内の初任地として下伊那郡阿南町新野の旦開(あさげ)小学校に赴任した当初から植物調査を行い、高山帯の調査では 1965 年に南アルプスで植生学を専門とする鈴木時夫博士(1911-1978)の指導を受けている。このとき鈴木博士から「調査は必要にして十分でなければならない」と教わったそうである。緻密な調査は高山帯から里山に、そして飯田・下伊那地域全体に及んでいった。その成果は、長野県植物研究会誌の記念すべき第 1 号(1968)において「アカマツ林の植物社会学的研究―特に伊那谷を中心として―」として掲載されているが、これは清水建美先生の



写真 1. 浅野一男氏。2005 年 5 月撮影。
提供 大塚孝一氏。

巻頭記事に続く 2 番目の記事である。なお同号の 3 番目の記事は中山冽名誉会長のものであり、お二人とも発足当時の研究会で幹事を務められている。以降、第 40 号(2007)まで、長野県植物誌の補遺を含めると、ほぼ毎号、記事を投稿しており、長くに貢献されている。

南アルプスの山域全体を対象とした植生調査は昭和 37 年(1962)から行い、その成果は日本生態学会誌上で 3 回にわたって掲載された。その中で、タイツリオウギやイワスゲなどを標徴種とする「イワオウギ軍団」、ヒメスゲやミヤマウシノケグサを標徴種とする「ヒメカワズスゲ＝ワラハナゴケモドキ軍団」、さらにそれらの下位群集などを新記載している。また、土壌や光環境の調査データをもとに、群集毎の各構成要素がどのような地史的要因・環境要因のもとに生育し、植物社会を形成しているのかを整理している。この研究は、長野県植物研究会誌 5～7 号(1972-74)の「植物社会成立の地史的背景」と題する 3 回の連載にも要約されている。

また、この南アルプスでの植生調査の傍ら、イヌヤマハッカやカメバヒキオコシの近縁の分類群の葉の変異を丹念に調べている。その結果をもとに植物研究雑誌(1972)上でイヌヤマハッカ *Isodon umbrosus* (Maxim.) H.Hara の変種・品種

* 長野市立博物館分館 戸隠地質化石博物館
〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400

としてコマヤマハツカ var. *komaensis* (Okuyama) Asano、シロバナカメバヒキオコシ var. *leucanthus* (Murai) Asano、カメバヒキオコシ var. *l. f. kameba* (Okuyama ex Ohwi) Asano、ハクサンカメバヒキオコシ var. *hakusanensis* (Kudô) Asano、タイリンヤマハツカ var. *excisinflexus* (Nakai) Asano の新組合せ・新階級を発表している。また、これとは別に氏の命名した品種にシロバナオオナンバンギセル *Aeginetia sinensis* G.Beck f. *albifrora* Asano、ベニバナマイワカガミ *Schizocodon intercedens* Yamazaki f. *rubiflorus* Asano が、山崎敬氏 (1921-2007) とともに命名した変種にキソウラジロアザミ *Cirsium norikurense* Nakai var. *kisoense* Yamaz. et Asano がある。

浅野氏は昭和 50 年 (1975) 頃まで飯田・下伊那地域で公立小中学校の教員を務め、また東京に居を移した後も同地域をフィールドとして頻繁に通っており、下伊那郡下の町村から町誌や村誌の植物の章の執筆を委嘱されることがしばしばあった。その調査の際に土地の住民から過去の植栽の情報を得る必要があることを痛感し、聞き取りを始めたことをきっかけとして、昭和 45 年 (1970) ごろから同地域の植物民俗についての調査を行っている。植物名の方言について調べた成果は、植物研究会誌 14 ~ 25 号 (1981-92) に「長野県下伊那地方の植物方言」として 12 回にわたり連載している。調査は対面方法によって方言の種類をおよそ把握したのちに、特定の方言の分布域を調べるために、市町村や団体等を通じて質問用紙を住民に配布する方法をとり、飯田・下伊那地域全体で詳細に行っている。この調査で採録された方言名はカタバミでスイナ、ミツバナなど 60 種類、シュンランで 57 種類、ジャガイモで 43 種類にも及ぶ。また、町村誌の執筆に関わった地域を中心に、それぞれの植物の利用法も詳しく調べ、さらに天気や気象の俗信、小正月の呼び名、節分の豆まきの際の唱え言など、植物分野を越えた調査も行っている。これらの民俗学的調査は、各町村・地区ごとに「長野県下伊那郡〇〇村の植物民俗」などと題して冊子にまとめ、自費出版している。

こうした植物や民俗の調査で得られた広範囲におよぶ膨大なデータは、地図上にプロットして整理することが多かった。このような分布図は、植物の方言や民俗についても、植物の分布と同じく、隣接県との関りや由来の考察に便利である。これは、初め浅野氏が手描きで行っていたが、後に科学写真家で

ある伊知地国夫氏 (1950-、日本自然科学写真協会副会長・元学習院大学理学部助手) の協力によってパソコン上で分布図プログラムが作成され、緯度・経度の入力データに基づいて描かれるようになった。伊知地氏は浅野氏の植物の野外調査に同行することもあり、撮影された写真は浅野氏との共著「伊那谷の植物」(1986) を始め浅野氏の多くの著作に掲載されている。

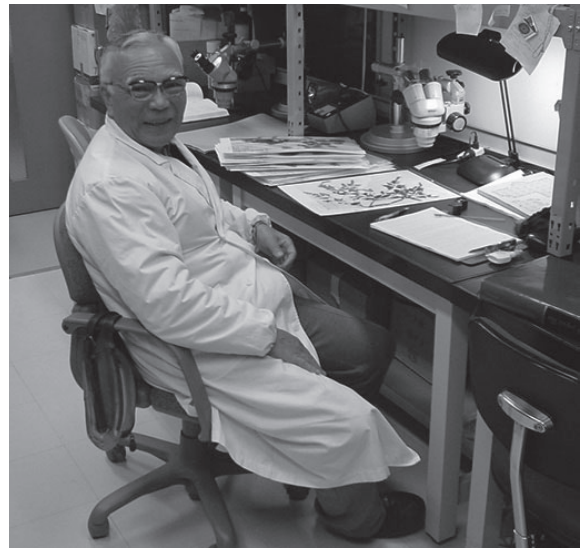
浅野氏は科学的に収集したデータをわかりやすく一般の人に伝えることにも力を注いできた。「天龍村の植物」(天龍村教育委員会 1992, 写真 2) は中高生が自力で図鑑を使えることを目的としており、植物の各部位の形態などの専門用語が平易に解説されている。また、「天竜川水系 あそび心の花観察」(新葉社 2000, 写真 2) は 1 ページに 1 種の植物について、種の特徴や分布だけでなく、名前の由来や方言名、観察ポイント、さらに「花の楽しみ方」として遊びや年中行事での利用なども紹介されていて、植物への興味や親しみが増すよう工夫されている。

浅野氏は高度経済成長期の中で、自然環境や人々の暮らしが、急激に大きく変化することを目の当たりにしながら調査を行ってきた。民俗調査を精力的に行ったのも、地域の失われゆく文化を記録に残さなければならない、という使命感からであった。土地の改変や耕作地の放棄、採集圧などによって景観が変わり、絶滅に瀕する植物が増えたことを憂え、そうした現状を 1992 年から 3 年間、ほぼ週に 1 回の頻度で「南信州新聞」に連載した。その記事は単行本「植物への挽歌」(南信州新聞出版局 1997) にまとめられ、改訂版 (文芸社 2010, 写真 2) も発刊されている。この本には浅野氏が「2400 の恋人」と呼んだ山野の植物のそれぞれの身に起きた受難が、詳細な調査データと氏の実体験をもとに語られているだけに非常にリアルで、氏の落胆や祈りの声が胸に痛い。一方、同著の 97 年版では、自然を保護するには、子供や若者に感動する心をはぐくむことが必要で、そのためには身の回りの自然をよく見ること、現状をしっかりと把握するよう行動を起こすべきであると述べている。そして「人里の動植物は好個の研究材料を提供してくれるでしょうから、植物でも動物でも身の回りから何か 1 つ選んで調べてみませんか。これが誰にでもできる自然保護の第一歩です」と訴えている。

浅野氏の晩年の大作である「阿智村の植物 レッドデータブック阿智 (維管束植物編)」(阿智村 2005, 写真 2) では、村内に調査員を募り、標本デー



写真 2. 浅野一男氏の代表的な著書。

写真 3. 浅野一男氏、牧野標本館にて。
2001 年 11 月撮影。

タを集め、さらに県内外に収蔵されている飯田・下伊那地域の過去の標本や文献のデータも収集し、地域全体の分布情報を地図上にプロットすることで、阿智村の特徴を鮮明にしている。用いたデータ数は標本 106,375 点、文献・視認記録 107,058 点、計 213,433 点に及ぶ。またこれらのデータを用いて科学的な評価基準に照らし、阿智村のレッドデータブックを編纂した。このような取り組みが個人で達成されることは、浅野氏の長年にわたる調査データの積み重ねがあり、また阿智村や多くの協力者の支えがあったとは言え、感嘆すべきことで、私が浅野氏を始めて知ったのも、この本の出版の時であった。今回の執筆のために浅野氏の業績を改めて調べることで、徹底したデータ収集とそれらを科学的に解析し、成果にまとめるという姿勢を貫かれたかただったことを理解することができた。地方の植物研究に携わる者の一人として、尊敬し見習うべき先輩であると思う。

本稿を書くにあたり、本稿末の「浅野一男氏 業績」の文献を参考にした。

次に、浅野氏と長野県植物研究会を通して親交があった、同会副会長の大塚孝一氏の寄稿文を掲載する。

浅野一男先生の思い出

大塚孝一 長野県植物研究会副会長

私が浅野先生に初めて会ったと記憶しているのは、1974 年 7 月 27 日、28 日に大鹿村で開催され

た植物研究会の第 43 回例会だったと思う。私はまだ学生で、大河原の宿に泊まり青木川上流の天主岩を目指した。この時は参加者 6 名と少なかったが、浅野先生が幹事で案内役を務め、奥原弘人先生もいた。この頃の例会は奥原先生が主に指導されていた。いろいろ植物を勉強できたが、記憶をたどれば大河原から路線バスが出ていて(?) 少し上流まで行き、そこから林道をかなり歩いて溪谷を遡行し、けっこう大変な探索だったと記憶している。研究会誌にこの時の例会報告がないので、詳しいことが思い出せないでいるが、トヨグチイノデがあったのを良く覚えている。

浅野先生は群落学がご専門のように思うが、植物分類学にも精通され植物相の研究も良くされた。葉形の変異に基づきイヌヤマハッカとカメバヒキオコシの類の分類の再検討を行っている(浅野 1972)。この時の論文が堀田満著「植物の分布と分化」(三省堂 1974) に引用され、分布図と葉形の変異の図が載っている。すごいなと思う。山崎敬(2000)がテツカエデの新変種としてコウシンテツカエデを記載したが、浅野先生が南信濃池口山で採取したものがタイプ標本となっている。

「阿智村の植物」など、下伊那の町村ごとの植物相をまとめられ出版していて、その集大成が「下伊那植物誌」の出版だったと思うが、日を見ずに亡くなられてしまい残念でした。まとめの過程でシダについては同定を頼まれ、標本を見た時期があったが、標本に基づいた分布図もできていた。研究会 2011 年度の大会が 6 月 11 日に伊那市の伊那図書館で開

催され、浅野先生には「下伊那の植物相」と題して特別講演をお願いした。下伊那地方の植物分布の特徴として、日本海要素の植物、ササ属の分布、襲速紀要素の植物、西日本型の分布をする植物など詳しく説明され、また、ササユリとヤマユリの分布、シロバナネコノメソウ列の植物なども詳しく解説された。

標本もたくさん作られ、「長野県植物誌」のまとめで信州大学標本庫 SHIN に収蔵されたほか、多くは東京都立大の牧野標本館 MAK に収納した。重複標本の一部は長野県環境保全研究所標本庫 NAC にも寄贈された。晩年は牧野標本館によく通われていたようで、私も標本調査に行ったときなど、牧野標本館で先生にお会いしたことがあった（写真 3）。いつもにこにこされて、優しく接して下さったことが印象に残っている。

「長野県植物誌」の執筆では、アザミ属とタンポポ属を除いたキク科を受け持った。大きな科をまとめ上げたが、ヒヨドリバナバイスウタイという種名を知ったのもこの書であった。

「長野県版レッドデータブック維管束植物編」（2002）の編纂については、作成委員会植物専門部会員として尽力された。「非維管束植物編・植物群落編」（2005）についても、群落編でウラジロガシ・サカキ群落、クロベ群落、モミ・シキミ群落など 25 群落を執筆している。

まだまだ成果を残されるかと思っていましたが、残念です。

浅野一男 氏 業績

浅野氏が単著の場合はお名前を省略した。共著の場合は著者を末尾に記した。

【著書・編書】

- 1969 共著 鼎町誌, 第一編自然. 鼎町誌編纂委員会
- 1977 共著 下条村誌, 自然環境編. 下条村誌刊行会
- 1982 著 長野県下伊那郡上村の植物民俗. 浅野一男
- 1982 共著 清内路村誌, 第一編自然. 清内路村誌刊行会
- 1982 著 長野県下伊那郡の俗信. 浅野一男
- 1983 著 長野県下伊那郡南信濃村の植物名方言と植物民俗. 浅野一男
- 1983 編 長野県下伊那郡上郷町の植物名方言と植物民俗 第 1 集. 上郷町植物を語る会
- 1984 著 長野県下伊那郡根羽村の植物と民俗 第 1

集, 浅野一男

- 1984 著 天龍村の植物と民俗 第 1 集. 浅野一男
- 1984 編 長野県下伊那郡上郷町の植物名方言と植物民俗 第 2 集. 上郷町植物を語る会
- 1986 共著 伊那谷の植物. 信濃毎日新聞社. 浅野一男・伊知地国夫
- 1987 共著 阿南町誌, 第一編自然. 阿南町
- 1988 著 下伊那の俗信資料 I・農業の部. 浅野一男
- 1988 著 下伊那植物名方言分布図集 I. 浅野一男
- 1991 著 浪合村の植物. 浪合村教育委員会
- 1992 著 天龍村の植物. 天龍村教育委員会
- 1993 共著 根羽村誌, 第一編自然. 根羽村誌刊行会
- 1997 著 植物への挽歌. 南信州新聞社出版局
- 1997 共著 長野県植物誌 キク科・長野県の植物地理, 清水建美監修. 信濃毎日新聞社
- 1999 著 花の観察ハンドブッケーインストラクター養成教本一. 浪合村教育委員会
- 2000 著 天竜川水系 あそび心の花観察. 新葉社
- 2005 著 阿智村の植物 レッドデータブック阿智 (維管束植物編). 阿智村
- 2005 共著 長野県版レッドデータブック 非維管束植物編・植物群落編. 長野県
- 2010 著 植物への挽歌 改訂版. 株式会社文芸社 (以下発行年不明の著書)
- 著 天気・気象の俗信 (飯田・下伊那)
- 著 下伊那地方の俗信 下伊那のことわざ農業の部
- 著 高森町高等植物目録 (1992 年ごろ・未完)
- 著 根羽村の植物と民俗第 2 集

【共訳】

- 1974 J.W. プレイナード著 自然保護ハンドブック. 地人書館

【論文・報告文等】

- 「長野県植物研究会誌」長野県植物研究会
- 1968 アカマツ林の植物社会学的研究—特に伊那谷を中心として—. 1: 6-13
- 1972 植物社会成立の地史的背景 (1). 5: 26-37
- 1973 植物社会成立の地史的背景 (2). 6: 17-27
- 1974 植物社会成立の地史的背景 (3). 7: 54-56
- 1977 チマキザサーショウジョウスゲ群集について. 10: 80-90
- 1977 長野県の社寺林 (予報). 10: 97-101. 林一六・浅野一男・土田勝義・和田清
- 1978 東海地方東部のモミ林の構造と分布. その 1.

- 11: 1-24
1978 スダジイ群団領域の非帯状植物社会—シバヤナギ群集 (新). 11: 25-31. 浅野一男・中山洸
1978 鈴木時夫先生を悼む. 11: 85-86
1979 東海地方東部のモミ林の構造と分布. その 2. 12: 14-26
1980 長野県下伊那郡阿南町新野の植物名方言. 13: 37-46
1981 長野県下伊那地方の植物方言. 14: 45-52
1982 長野県下伊那地方の植物名方言 2. 15: 48-53
1983 長野県下伊那地方の植物名方言 3. 16: 42-49
1984 長野県下伊那地方の植物名方言 4. 17: 38-47
1985 長野県下伊那地方の植物名方言 5. 18: 47-54
1986 下伊那地方のフロラに追加されるべき植物 2 種. 19: 6
1986 長野県下伊那地方の植物名方言 6. 19: 29-36
1987 下伊那地方フロラ新知見 I. 20: 113
1987 長野県下伊那地方の植物名方言 7. 20: 136-146
1988 下伊那地方フロラ新知見 II. 21: 25-27
1988 長野県下伊那地方の植物名方言 8. 21: 36-48
1989 下伊那地方フロラ新知見 III. 22: 5-6
1989 長野県下伊那地方の植物名方言 9. 22: 18-27
1990 下伊那地方フロラ新知見 IV. 23: 11
1990 長野県下伊那地方の植物名方言 10. 23: 17-30
1990 ヤマイワカガミの紅花品. 23: 31
1991 ベニバナヤマイワカガミの分類学的考察. 24: 15-16
1991 下伊那地方フロラ新知見 V. 24: 36-41
1991 長野県下伊那地方の植物名方言 11. 24: 44-63
1992 長野県下伊那地方の植物名方言 12. 25: 38-41
1998 ホザキヤドリギの下伊那新産地. 31: 32-33. 浅野一男・北澤あさ子
1998 イナヤマオダマキ, 「長野県植物誌」補遺 清水建美 (編), p41. 31: 40-43
1999 三信国境茶臼山の植物観察会. 32: 77-78
2001 ヒダカノリウツギ, 「長野県植物誌」補遺 (4) 清水建美 (編), p66, マメダオシ・コナミキ・ナツノタムラソウ・ヒメハッカ・オランダハッカ・イワブクロ, 同, p67, ケカンボク・マルバヨノミ・ヒロハコツクバネウツギ・ケツクバネウツギ・エゾノチチコグサ, 同, p68. 34: 63-70. 浅野一男・菅原敬
2002 長野県菅平湿原の植物生態 2. 群落構造. 35: 25-29. 浅野一男・林一六・平林国男・伊藤静夫・中山洸・清水建美・土田勝義
2002 「長野県植物誌」(1997) に追加される下伊那地方産の植物 (1). 35: 53-54
2002 ハリタデ・ハマカキネガラシ, 「長野県植物誌」補遺 (5) 清水建美 (編), p66, オオズミ・シロバナコマツナギ・フジウメモドキ・サワゼリ・シロバナツリガネニンジン, 同, p67, ミズヒキモ・ヒロハノセンニンモ・ミズギボウシ・クロミノタケシマラン, 同, p68. 35: 66-68. 浅野一男・菅原敬
2005 「長野県植物誌」(1997) に追加される下伊那地方産の植物 (2). 38: 95-113
2005 下伊那教育会館所蔵維管束植物標本目録 1. 38: 115-126
2005 タチク라마ゴケ・アカフユノハナワラビ・ケコシノサトメシダ・トガクシイヌワラビ・タマシケシダ・ミヤマミズ, 「長野県植物誌」補遺 (8) 清水建美 (編), p127, ヒメタデ・ヌカボタデ, 同, p128, ヒメキンセンカ・コウライマムシグサ・ホソバテンナンショウ・ヤマザトマムシグサ・イヌホタルイ・ニイタカスゲ, 同, p130, ヌカススキ, 同, p131. 38: 127-131. イヌホタルイは中山洸と共著
2006 ビロードウリノキ, 「長野県植物誌」補遺 (9) 清水建美 (編), p131. 39: 131-132
2007 下伊那産帰化植物初採集標本目録. 40: 155-167
「植物研究雑誌」株式会社ツムラ
1959 オオナンバンギセルの白花品. 34(6): 24
1964 高等植物分布資料 (28) ミカワバイケイソウ・ヤマイワカガミ・ウラハグサ. 39(6): 172
1964 高等植物分布資料 (29) キバナノショウキラン. 39(7): 208
1964 高等植物分布資料 (30) クチナシグサ・オオヒキヨモギ. 39(7): 215
1964 高等植物分布資料 (32) ミヤマトサミズキ・ツルアリドオシ・タコノアシ. 39(9): 271
1965 キソウラジロアザミ. 40(1): 4-5. 山崎敬・浅野一男
1966 高等植物分布資料 (45) メリケンガヤツリ・キソウラジロアザミ. 41(4): 107
1972 イヌヤマハッカ・カメバヒキオコシとその変異について. 47(2): 54-64
1972 木曽山脈の垂直植生帯とブナ林に関する若干

- の考察 . 47(5): 144-156
- 1974 赤石山脈の亜高山帯森林植生 特にダケカンバ
林の性格について . 49(1): 19-32
- 1974 ヤマオダマキの一品種 . 49(9): 263-264
- 「日本生態学会誌」日本生態学会
- 1967 赤石山脈の高山帯植物社会 II. 高山崩壊地草
原と草本性高山ハイデ . 17(6): 251-262. 浅野
一男・鈴木時夫
- 1969 赤石山脈の高山帯植物社会 VI. 湿原群落 .
19(3): 102-116
- 1971 赤石山脈の高山帯植物社会 IV. 高山ハイデの
ウシマツツジ=マキバエイランタイ群集 .
21(3・4): 104-115
- 「植物地理・分類研究」植物地理・分類学会
- 2008 ベニバナイチゴ *Rubus vernus* (バラ科) の長
野県における新産地 . 56: 32
- 「北陸の植物」北陸の植物の会
- 1978 木曾山脈のツガーコメツガ混合林 . 25: 126-

138

- 「信濃教育」信濃教育会
- 1962 三信国境地帯のコセリバオウレンの分布につ
いて . 906: 80-83
- 「下伊那教育」下伊那教育会
- 1966 下伊那地方の植物分布 . 70:
- 「長野県民俗の会会報」長野県民俗の会
- 1981 長野県下伊那郡南信濃村和田の植物名方言と
植物民俗 (一). 4: 16-34
- 1982 長野県下伊那郡南信濃村和田の植物名方言と
植物民俗 (二). 5: 38-52
- 「上郷町植物を語る会誌」上郷町植物を語る会
- 1988 編 上郷町植物を語る会誌 第 1 号
- 1989 編 上郷町植物を語る会誌 第 2 号
- 1989 編 上郷町植物を語る会誌 第 3 号
- 「伊那」伊那史学会
- 1998 下伊那郡西部地域の外竈行事 . 46(7): 3-7